

之

第五條

本協定以漢文及日本文爲正文漢文原文與日本文原文間遇有解釋不同之處應以日本文原文爲準

爲此記名各員各奉本國政府之正當委任將本協定署名蓋印以昭信守

康德三年六月二十九日

於新京繕成本書兩份

昭和土年六月二十九日

滿洲帝國外交部大臣

張 燕 卽(印)

植 田 謙 吉(印)

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

急

條一機密第四一六號

昭和十年六月二十九日

外務次官 堀 内 謙

内閣書記官長 藤沼庄平殿



日本國滿洲國間工業所有權相互保護ニ關スル
協定公布方請議ノ件

本件ニ關シテハ有田外務大臣ヨリ廣田内閣總理大臣宛昭和十一年六
月二十四日附條一機密第三九八號ヲ以テ申進ノ次第アリタル處本件
協定ハ六月二十九日署名調印ヲ了シタルニ付至急公布方御取計相成
度尙前掲往信ニ添付セル協定ノ日本文及漢文ノ末尾及署名振左記ノ
通記入方御取計相成度記入濟ノモノ御参考迄別添ノ通及御送付候也

記

一 協定日本文

昭和十一年六月二十九日即チ康徳三年六月二十九日新京ニ於テ本書二通ヲ作成ス

植田謙吉(印)
張燕卿(印)

一 同漢文

康徳三年六月二十九日

於新京繕成本書兩份

昭和十一年六月二十九日

張燕卿(印)
植田謙吉(印)

條約第 號

日本國滿洲國間工業所有權相互保護ニ關スル協定

大日本帝國政府及滿洲帝國政府ハ工業所有權ノ相互保護ヲ確保センガ爲左ノ如ク協定セリ

第一條

締約國ノ一方ノ臣民ハ法定ノ手續ヲ履行スルトキハ他方ノ領域内ニ於テ發明特許、實用新案、意匠及商標ニ付内國ノ臣民ト同一ノ保護ヲ受クベシ

第二條

締約國ノ一方ニ於テ發明特許ノ出願又ハ實用新案、意匠若ハ商標ノ登錄出願ヲ合式ニ爲シタル者又ハ其ノ承繼人ハ他方ニ於テ出願ヲ爲スニ付優先權ヲ享有スベシ

前項ノ優先期間ハ發明特許、實用新案及意匠ニ在リテハ十二月、商標ニ在リテハ六月トス

第三條

締約國ノ一方ハ他方ニ於テ發明特許、實用新案及意匠ニ關シ手數料、特許料又ハ登錄料ヲ徵セラルコトナキモノトス

第四條

本協定ハ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議ヲ以テ定ムル
日ヨリ之ヲ實施ス

第五條

本協定ノ正文ハ日本文及漢文トシ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニスルトキハ日本文本文ニ依リ之ヲ決ス

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本協定ニ署名調印セリ

昭和十一年六月二十九日即チ康德三年六月二十九日新京ニ於テ本書二通ヲ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使 植田謙吉(印)
滿洲帝國外交部大臣 張燕卿(印)

右漢文左ノ如シ

關於滿洲國與日本國間工業所有權互相保護之協定

滿洲帝國政府及大日本帝國政府爲確保工業所有權之互相保護起見協定如左

第一條

締約國一方之臣民履行法定程序時在他方之領域內關於特許發明實用新案意匠及商標應享受與內國臣民相同之保護

第二條

在締約國一方合式爲特許發明之呈請或實用新案意匠及商標之註冊呈請者或其承繼人在他方關於爲呈請應享有優先權

前項優先期間在特許發明實用新案及意匠以十二箇月爲限在商標以六箇月爲限

第三條

締約國一方在他方關於特許發明實用新案及意匠免收手續費特許費或註冊費

第四條

本協定自滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間以協議所定之日起實施

之

第五條

本協定以漢文及日本文爲正文漢文原文與日本文原文間遇有解釋不同之處應以日本文原文爲準

爲此記名各員各奉本國政府之正當委任將本協定署名蓋印以昭信守

康德三年六月二十九日

於新京繕成本書兩份

昭和十一年六月二十九日

滿洲帝國外交部大臣
滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

張植
田燕
諒吉
(印)

中

千九百三十年倫敦海軍條約ノ規定ニ依ル英國ノ
條約量超過驅逐艦保有問題ニ關スル件

右謹テ裁可ヲ仰ク

昭和十一年八月二十一日

内閣總理大臣廣田弘毅



一
三

外官第七七號

案起昭和十一年八月十八日

裁可昭和十一年八月二十日

施行昭和十一年八月二十一日

決定昭和

年月

日行

內閣總理大臣

五

內閣書記官長

内閣書記官



外務大臣

五

陸軍大臣

三

内務大臣

五

海軍大臣

四

文部大臣

一
三

遞信大臣

五

農林大臣

五

鐵道大臣

九

商工大臣

五

拓務大臣

五

別紙外務海軍兩大臣請議

千九百三十年倫敦海軍條約ノ規定

依ル英國、條約量超過驅逐艦保有問

題二關スル件

右閣議ニ供入

指令案

千九百三十年倫敦海軍條約、規定ニ依ル
英國、條約量超過驅逐艦保有問題ニ關
スル件請議・通

極秘



倫海機密第五一九號

昭和十一年八月十七日

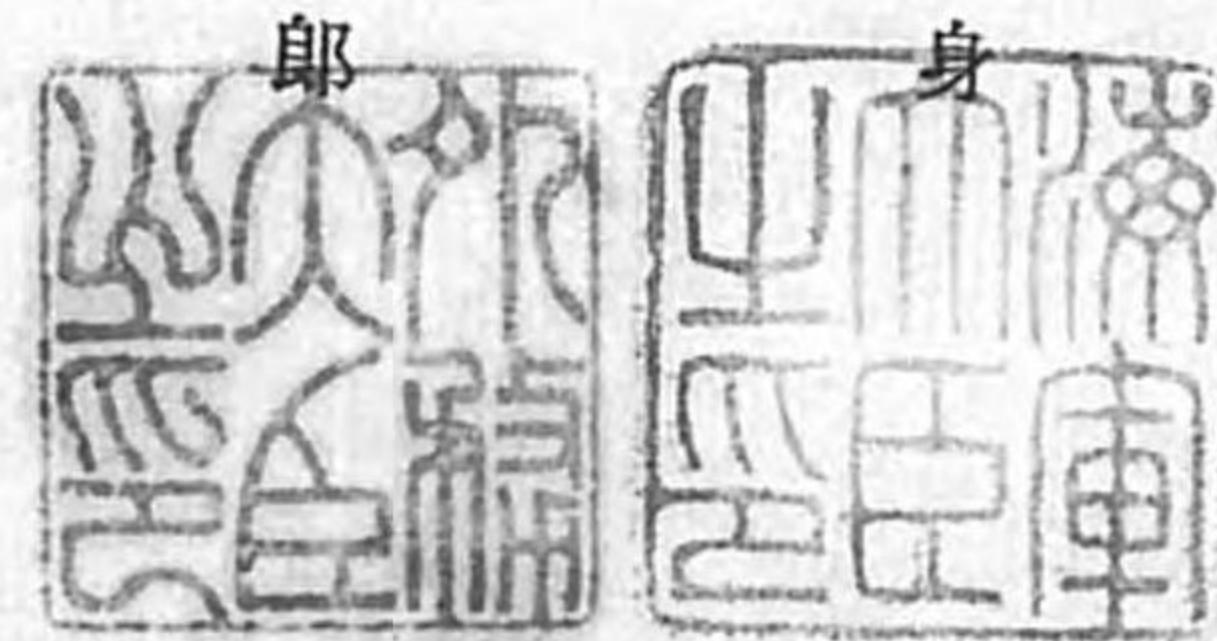
海軍大臣 永野 修

外務大臣 有田 八郎

内閣總理大臣 廣田 弘毅 殿

千九百三十年倫敦海軍條約ノ規定ニ依ル英國ノ條約量
超過驅逐艦保有問題ニ關スル件

本件ニ關シ別紙ノ通閣議決定相成様致度此段及請議候也



本年七月十五日英國政府ヨリ千九百三十年倫敦海軍條約第二十一條ノ規定ニ從ヒ條約量超過驅逐艦四萬噸ヲ保有スルニ決シタル旨通報越セリ

前記條項ニ依レハ右英側措置ニ對シ帝國政府ハ驅逐艦二萬八千百三十三噸ヲ條約量ヲ超エテ保有スルノ權利ヲ有スル處帝國ノ條約量超過驅逐艦噸數ハ一萬一千五十九噸ナルヲ以テ我方ハ驅逐艦種ノミニ於テハ權利ノ全部ヲ行使スル能ハサル現狀ニ在リ依テ我方權利量ニ於ケル不足分ハ他艦種ニ於ケル現存艦船ヲ以テ之ヲ補フヲ最モ適當トル處我方ニハ條約量超過艦トシテハ潛水艦アルノミナルヲ以テ之ヨリ補フコトトシ結局驅逐艦一萬一千五十九噸潛水艦一萬五千五百九十八噸合計二萬六千六百五十七噸ヲ保有スルコトト致度シ

尙右決定ノ次第ハ英米兩國政府ヘ通告スルコトト致度シ

は(イ)

驅逐艦ニ「エスカレーター」條項適用方ニ關スル七月十五日附在英吉田大使宛英國外務大臣書翰（假譯）

一、以書翰啓上致候陳者最近貴我兩國政府間ニ行ハレタル通報ニ關聯シ本官ハ一九三〇年倫敦海軍條約第十六條ニ掲ケラレタル噸數制限ヲ超エテ艦齡超過驅逐艦ヲ保有スルノ問題ニ對シ英國政府力更ニ考慮ヲ加ヘツツアリタルコトヲ閣下ニ通報スルノ光榮ヲ有シ候ニ本年五月六日閣下ニ通報セラレタル覺書ハ英國政府力驅逐艦噸數ト潛水艦噸數間ノ重大ナル不均衡ヲ阻止センカ爲一九三〇年倫敦海軍條約第十六條ニ依リ一九三六年十二月三十一日ニ全英聯盟ノ保有シ得ル驅逐艦總噸數ヲ超エテ艦齡超過驅逐艦四萬噸ヲ保有スルコトニ依リ其ノ驅逐艦總噸數ヲ增加スルノ已ムナキニ不本意乍ラ至リタル理由ノ陳述ヲ包含致候右通報中英國政府ハ右噸數ノ増加力同條約二十一條ニ示サレタル手續ニ訴フルノ必要ナクシテ友好的商議ニ依リ實現セラレントノ希望ヲ表明致候

二、本年六月十一日接受セラレタル回答ニ於テ米國政府ハ一九三〇年

倫敦海軍條約中同條約ノ噸數限度引上ノ爲設ケラレタル唯一ノ方法タル第二十一條ヲ英國政府力適用スルニ於テハ米國政府ノ見解ニ依レハ噸數增加ノ合法性並ニ妥當性ニ關シ何等ノ問題ヲ生セサルヘク又從テ一九三〇年條約第三編ノ各當事國ノ法律的地位モ明確トナルヘシトノ意見ヲ表明致候

四 本官ハ米國政府ノ右見解ノ表明ハ英國政府ノ慎重ニ考慮シタル所ニシテ英國政府ハ更ニ米國議會ハ爾來閉會シタル爲條約第十六條ニ規定セラルル噸數ヲ變更スル新國際約定ハ本年中ニハ米國上院ノ協贊ヲ得ラレサルヘキ事實ニ依テ動カサレタルコトヲ閣下ニ通報スルノ光榮ヲ有シ候

五 以上ノ事情ニ於テ本官ハ英國政府ハ軍艦ニ關シ同國ノ安全ノ要件カ一九三〇年倫敦海軍條約第三編ノ當事國以外ノ諸國ノ潛水艦ノ新建造ニ依リ重大ナル影響ヲ受ケタリトノ見解ナルニ依リ一九三六年十二月三十一日ニ於テ超過スヘカラサルモノトシテ同條約第

は(イ)

十六條第一項ニ規定セラレタル頓數ヲ超エテ更ニ四萬頓ノ艦齡超過驅逐艦ヲ第二十一條ニ基キ保有スルニ決定シタル旨ヲ閣下ニ通報スルノ光榮ヲ有シ候本官ハ閣下力本件ニ關シ英國政府ノ到達セル決定ヲ本國政府ニ通報セラルレハ幸甚ニ有之候

六 本官ハ閣下力右ノ事情ニ於テ日本政府ハ一九三〇年倫敦海軍條約第二十一條ニ從ヒ驅逐艦艦種ニ於ケル超過頓數ノ比例的數量ヲ保有スルノ權利ヲ行使セントセラルルヤ否ヤヲ本官ニ通報セラルレハ幸甚ニ有之候

右申進旁々本官ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

一九三六年七月十五日

外務省ニ於テ
外務大臣ニ代リ
「アル、エル、クレーギー」

吉田大使閣下

FOREIGN OFFICE, S.W.1.

(A 5534/4/45)

15th July, 1936.

Your Excellency,

With reference to the communications which have recently passed between our two Governments, I have the honour to inform Your Excellency that His Majesty's Government in the United Kingdom have been giving further consideration to the question of the retention by this country of over-age destroyer tonnage in excess of the tonnage limitation contained in Article 16 of the London Naval Treaty, 1930.

2. The memorandum communicated to Your Excellency on May 6th last contained a statement of the reasons for which His Majesty's Government have found themselves reluctantly obliged, in order to prevent a serious disequilibrium between destroyer and submarine tonnage, to increase their total destroyer tonnage by the retention of 40,000 tons of over-age destroyers in excess of the aggregate tonnage which, under Article 16 of the London Naval Treaty, 1930, the Members of the British Commonwealth of Nations are allowed to possess on December 31st, 1936. In that communication His Majesty's

Government

His Excellency

Mr. Shigeru Yoshida, K.C.V.O.,
etc., etc., etc.

Government in the United Kingdom expressed the hope that this increase in tonnage might be effected by friendly negotiation, without the necessity of a recourse to the procedure indicated in Article 21 of that Treaty.

3. In their reply received on June 11th last the United States Government expressed the opinion that, if His Majesty's Government in the United Kingdom would invoke Article 21, which constituted the only method provided in the London Naval Treaty of 1930 for raising the tonnage limits of the Treaty, no question would, in their opinion, arise as to the legality and propriety of the increase in tonnage and the legal position of all Powers party to Part III of the London Naval Treaty of 1930 would, in consequence, be clarified.

4. I have the honour to inform Your Excellency that this expression of the view of the United States Government has received the careful consideration of His Majesty's Government, who have furthermore been impressed by the fact that, as the Congress of the United States has since adjourned, no new international agreement varying the tonnages laid down in Article 16 of the Treaty could receive the approval of the Senate of the United States before the expiration of the present year.

5. In all the circumstances, I have the honour to inform Your Excellency that His Majesty's Government in the United Kingdom, being of the opinion that the requirements of the national security of the United Kingdom in respect of vessels of war are materially affected by new construction of submarines by Powers other than those who have joined in Part III of the London Naval Treaty, 1930, have decided under Article 21 of that Treaty to retain an additional 40,000 tons of over-age destroyer tonnage over and above that specified in Article 16, clause 1, as not to be exceeded on the 31st December, 1936. I should be grateful if Your Excellency would be so good as to inform your Government of the decision reached by His Majesty's Government in the United Kingdom in this matter.

6. I should be grateful if Your Excellency would inform me whether, in the circumstances, the Japanese Government propose to avail themselves of their right under Article 21 of the London Naval Treaty, 1930, to retain a proportionate amount of excess tonnage in the destroyer category.

I have the honour to be,
with the highest consideration,
Sir,

Your Excellency's obedient Servant,
(Sgd.) R.L. CRAIGIE.
(for the Secretary of State)

「ワシントン」海軍會議ニ依リ開始セラレタル事業ヲ進展セシメ且軍備ノ一般的ノ制限及縮少ノ漸進的實現ヲ容易ナラシメンコトヲ希望シ、海軍軍備ノ制限及縮少ニ關スル條約ヲ締結スルコトニ決シケテ左ノ如ク其ノ全權委員ヲ任命セリ

亞米利加合衆國大統領

國務長官「ヘンリ、エル、ステイムスン」

英國駐劄大使「チャールズ、ジー、ドーズ」

海軍大臣「チャールズ、フランシス、アダムズ」

「アーカンソー」州選出上院議員「ジョーセフ、ティー、ロビンソン」

「ベンシルヴェニア」州選出上院議員「デーヴィド、エー、リード」

白耳義國駐劄大使「ヒュー、ギアスン」

「メリシコ」國駐劄大使「ドワイト、ダアリュー、モロー」

佛蘭西共和國大統領

内務大臣、内閣議長、下院議員「アンドレ、タルディエ」

外務大臣、下院議員「アリストイード、アリアン」

海軍大臣、下院議員「ジアック・ルイ、デュメニル」

殖民大臣、下院議員「フランソア、ヒエトリ」

英國駐劄佛蘭西共和國大使「エーメ・ジョセフ、ドゥ、フルリオ」

「グレー、アリテン」「アイルランド」及「グレー、アリテン」海外領土皇

ルラント」及「グレー、アリテン」「アイルランド」及「グレー、アリテン」海外領土皇

皇帝陛下及「日本國皇帝陛下」

競爭的軍備ニ常ニ伴フ危険ヲ防止シ且負擔ヲ輕減セシコトヲ希望シ茲ニ

●千九百三十年「ロンドン」海軍條約

咲桜密顧問ノ諮詢ヲ經テ昭和五年四月二十二日「ロンドン」ニ於テ帝國全權

委員カ亞米利加合衆國、英帝國、佛蘭西國及伊太利國ノ全權委員ト共ニ署

名調印シタル千九百三十年「ロンドン」海軍條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシ

ム（總理臨時代理外務、外務、海軍大臣副署）

亞米利加合衆國大統領、佛蘭西共和國大統領、「グレー、アリテン」「アイ

ルラント」及「グレー、アリテン」海外領土皇帝印度皇帝陛下、伊太利國

皇帝陛下茲ニ日本國皇帝陛下ハ

競爭的軍備ニ常ニ伴フ危険ヲ防止シ且負擔ヲ輕減セシコトヲ希望シ茲ニ

外務大臣、下院議員「アーサー、ヘンダスン」

海軍大臣、下院議員「アルバート、ヴィクトー、ブレグザンダード」

印度大臣、下院議員「ヴィリアム、ウェヤウッド、ベン」

「カナダ」

國防大臣、「カナダ」樞密顧問官、陸軍大佐「ジェームズ、レーテン、ローレルストン」

佛蘭西國駐劄「カナダ」特命全權公使、「カナダ」樞密顧問官「フィリップ、ローラ」

「オーストラリア」聯邦

貿易及稅關大臣「ジェームズ、エドワード、ブエントン」

「ニュー、ジーランド」

「ロンドン」駐在「ニュー、ジーランド」高級委員「トマス、マースン、ウイルフオード」

南阿弗利加聯邦

「ロンドン」駐在南阿弗利加聯邦高級委員「チャールズ、シアドア、ティル、ウォータード」

「アイルランド」自由國

「ロンドン」駐在「アイルランド」自由國高級委員「ティモジ、アロイシオス、スマディ」

印度

「ロンドン」駐在印度高級委員「サー、アトウール、チアンドラ、チアタジ」

「イスラエル」

「ロンドン」駐在伊太利國皇帝陛下

締約國ハ一千九百二十二年二月六日「ワシントン」ニ於テ相互ノ間ニ署名セラレ且本條約ニ於テ「ワシントン」條約ト稱セラルル海軍軍備制限ニ關スル條約ノ第二章第三節第一款ハニ掲ゲラルル規定ノ適用ヲ妨ケルコトナシ

右規定ハ不慮ノ事變ニ依リ亡失シ又ハ破壊セラレタル艦船ノ代換ニ關スル前記條約第二章第三節第一款ハニ掲ゲラルル規定ノ適用ヲ妨ケルコトナシ

尤モ佛蘭西國及伊太利國ハ前記條約ノ規定ニ依リ一千九百二十七年及一千九百二十九年ニ自國か起工スルノ權利ヲ與ヘラレタル代換トン數ヲ建造スルコ

第一編

外務大臣、下院議員「ディノ、グラント」
海軍大臣、上院議員、海軍戰隊少將「ジウセッペ、シリアンニ」
英國駐劄特命全權大使「アントニオ、キアラモンテ・ボルドナロ」
上院議員、海軍大將、男爵「アルフレド、アクトン」
日本國皇帝陛下
貴族院議員若槻禮次郎
海軍大臣、海軍大將財部麿
英國駐劄特命全權大使松平恒雄
白耳義國駐劄特命全權大使永井松三
英國駐劄特命全權大使松平恒雄
右各全權委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之ガ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ如ク協定セリ

第一條

トヲ得

第二節

一 合衆國「グレート・ブリテン」及北部「アイルランド」聯合王國並ニ日本國ハ左ノ主力艦ヲ本條ニ規定セラル所ニ從ヒ處分スベシ

合衆國

「フローリダ」

「ユタ」

「アーカンソー」又ハ「ワイオミング」

聯合王國

「ベンボー」

「アイアン、デューク」

「マーバラ」

「エンペラー、オヴ、インディア」

日本國

比叡

(イ) ロノ規定ヲ留保シ前記艦船ハ「ワシントン」條約第二章第二節二(ハニ依リ専ラ標的用ニ變更セラレザル限り左ノ如ク廢棄セラルベシ
合衆國ニ依リ廢棄セラルベキ艦船中ノ一隻及聯合王國ニ依リ廢棄セラルベキ艦船中ノ二隻ハ本條約ノ實施ノ時ヨリ十二月以内ニ「ワシントン」條約第二章第二節三(ロニ從ヒ職開任務ニ適セザルモノト爲
サルベシ右艦船ハ右實施ノ時ヨリ二十四月以内ニ右第二節二(イ)又ハ
(ロニ從ヒ確定的ニ廢棄セラルベシ合衆國ニ依リ廢棄セラルベキ艦船

中ノ第二隻並ニ聯合王國ニ依リ廢棄セラルベキ艦船中ノ第三隻及第

四隻ニ付テハ右期間ハ本條約ノ實施ノ時ヨリ夫々十八月及三十月ト

ス

(ロ) 本條ニ依リ處分セラルベキ艦船中左記ハ練習用ノ爲保有セラルコ

トヲ得

合衆國 「アーカンソー」又ハ「ワイオミング」

聯合王國 「アイアン、デューク」

日本國 比叡

右艦船ハ本條約第二編第二附屬書第五款ニ規定セラルル狀態ニ減勢セラルベシ右艦船ヲ要求セラレタル狀態ニ減勢スルノ作業ハ本條約ノ實施ノ時ヨリ合衆國及聯合王國ニ付テハ十二月以内ニ又日本國ニ付テハ十八月以内ニ之ヲ開始スベシ右作業ハ前記期間ノ滿了ノ時ヨリ六月以内ニ完了セラルベシ

右艦船中ノ何レカニシテ練習用ノ爲保有セラレザルモノハ本條約ノ實施ノ時ヨリ十八月以内ニ職開任務ニ適セザルモノト爲サレ且三十月以内ニ確定的ニ廢棄セラルベシ

二 本條約第一條ニ掲ゲラルル代換トン數ヲ佛蘭西國又ハ伊太利國ガ建造スルコトニ依リ「ワシントン」條約ニ依リ必要ト爲ルコトアルベキ主力艦ノ處分ヲ別トシ「ワシントン」條約第二章第三節第二款ニ掲ゲラルル一切ノ現存主力艦ニシテ處分セラルベキモノト前號ニ於テ指定セラレザルモノハ本條約ノ有效期間中保有セラルコトヲ得

三 代換ノ権利ハ代換トン數ノ起工ノ遲延ニ依リ失ハルコトナク且舊艦ハ代換セラルルニ至ル迄ハ「ワシントン」條約第二章第三節第二款ニ依リ

廢棄ノ期限ノ到來セル場合ト雖モ保有セラルコトヲ得

第三條

一 「ワシントン」條約ノ適用ニ付テヘ該條約第二章第四節ニ示サルル航空母艦ノ定義ハ茲ニ左ノ定義ヲ以テ之ニ代フ

「航空母艦」ナル用語ハ排水量ノ如何ヲ問ハズ特ニ且専ラ航空機ヲ搭載スルノ目的ヲ以テ設計セラレ且艦上ニ於テ航空機ノ發着シ得ル構造ヲ

有スル一切ノ水上艦船ヲ包含ス

二 主力艦、巡洋艦又ハ驅逐艦ニ航空機ノ著艦用又ハ離艦用ノ臺又ハ甲板ヲ裝備スルコトハ右艦船ガ專ラ航空母艦トシテ設計セラレタルカ又ハ改造セラレタルモノニ非ザル限り右ノ如ク裝備セラレタル艦船ヲ航空母艦ノ艦種ニ算入シ又ハ分類スルニ至ラシムルコトナシ

三 千九百三十年四月一日ニ現存スル主力艦ニハ航空機著艦用ノ臺又ハ甲板ヲ裝備スルコトヲ得ズ

第四條

一 口徑六・一インチ(百五十五ミリメートル)ヲ超ユル砲ヲ搭載スル基準排水量一萬トン(一萬百六十メートル式トン)又ハ之ニ達セザル航空母艦ハ何レノ締約國モ之ヲ取得シ又ハ之ヲ建造シ若ハ建造セシムルコトヲ得ズ

二 一切ノ締約國ニ付本條約ノ實施セラル時ヨリ口徑六・一インチ(百五十五ミリメートル)ヲ超ユル砲ヲ搭載スル基準排水量一萬トン(一萬百六十メートル式トン)又ハ之ニ達セザル航空母艦ハ何レノ締約國ノ法域内ニ於テモ建造セラレザルベシ

第五條

航空母艦ハ各場合ニ從ヒ「ワシントン」條約第九條若ハ第十條ニ依リ又ハ本條約第四條ニ依リ認メラルモノニ比シ一層有力ナル砲ヲ搭載スル爲ノ設計及構造ヲ有セザルコトヲ要ス

右第九條及第十條ノ何レノ場所ニ於ケルヲ問ハズ口徑六インチ(百五十二ミリメートル)ト掲ケラルルトキヘ口徑六・一インチ(百五十五ミリメートル)ヲ以テ之ニ代フ

第六條

一 「ワシントン」條約第二章第四節ニ規定セラルル基準排水量ノ決定ニ關スル規則ハ之ヲ各締約國ノ一切ノ水上艦船ニ適用スベシ

二 潛水艦ノ基準排水量トハ乗員充實セラレ、機関据附ケラレ且航海準備(一切ノ武器及彈藥、齊備品、備品、乘員用ノ糧食、各種ノ需品等ニ戰時ニ於テ搭載セラレベキ各種ノ器具ヲ含ム)完成シ唯燃料、潤滑油、清水又ハ「バラスト」用水ハ如何ナル種類ノモノノタルヲ問ハズ之ヲ搭載セザル工事完成セル艦船(非防水構造内ノ水ヲ含マズ)ノ水上排水量ヲ謂フ

三 海軍ノ各戰闘艦船ハ基準狀態ニ在ル際ノ該艦船ノ排水量トン數ニテ計測セラルベシ「トン」ナル語ハ「メートル式トン」ナル用語ニ於ケルモノヲ除クノ外二千二百四十ボンド(千十六キログラム)ノトンナリト解セラルベシ

第七條

一 基準排水量二千トン(二千三十二メートル式トン)ヲ超ユルカ又ハ口徑五・一インチ(百三十三ミリメートル)ヲ超ユル砲ヲ有スル潛水艦ハ何レノ締約國モ之ヲ取得シ又ハ之ヲ建造シ若ハ建造セシムルコトヲ得ズ

二 尤モ各締約國ハ基準排水量二千八百トン（二千八百四十五メートル式

トン）ヲ超エザル潛水艦最大限三隻ヲ保有シ、建造シ又ハ取得スルコトヲ得右潛水艦ハ口徑六・一インチ（百五十五ミリメートル）ヲ超エザル砲ヲ搭載スルコトヲ得右隻數内ニ於テハ佛蘭西國ハ既ニ造水セラレタル口徑八インチ（一百三ミリメートル）ノ砲ヲ有スル二千八百八十トン（二千九百二十六メートル式トン）ノモノ一隻ヲ保有スルコトヲ得

三 締約國ハ一千九百三十年四月一日ニ於テ其ノ所有セル基準排水量二千トン（二千三十二メートル式トン）ヲ超エザル潛水艦ニシテ口徑五・一インチ（百三十ミリメートル）ヲ超ユル砲ヲ裝備セルモノヲ保有スルコトヲ得

四 一切ノ締約國ニ付本條約が實施セラル時ヨリ基準排水量二千トン（二千三十二メートル式トン）ヲ超ユルカ又ハ口徑五・一インチ（百三十ミリメートル）ヲ超ユル砲ヲ有スル潛水艦ハ本條ニ規定セラル所ヲ除クノ外何レノ締約國ノ法域内ニ於テモ建造セラレザルベシ

第八條

左ノ艦船ハ之ニ對シ制限ヲ附スルコトアルベキ特別ノ協定ヲ留保シ制限ヲ免除セラル

(イ) 基準排水量六百トン（六百十メートル式トン）以下ノ海軍水上戰闘艦

船

(ロ) 基準排水量六百トン（六百十メートル式トン）ヲ超ユルモ二千トン（二千三十二メートル式トン）ヲ超エザル海軍水上戰闘艦但シ左ノ特性ノ何レモ有セザル場合ニ限ル

(一) 口徑六・一インチ（百五十五ミリメートル）ヲ超ユル砲ヲ搭載スル

コト

(二) 口徑三インチ（七十六ミリメートル）ヲ超ユル砲ヲ四門ヲ超エ搭載スルコト

(三) 魚雷ヲ發射スル様設計セラレ又ハ裝置セラレタルコト

(四) 特ニ戰闘艦船トシテ建造セラレタルニ非ザル海軍ノ水上艦船ニシテ

艦隊要務ノ爲ニ使用セラレ、軍隊輸送船トシテ使用セラレ又ハ戰闘艦船トシテノ用途以外ノ用途ニ使用セラルモノ但シ左ノ特性ノ何レモ有セザル場合ニ限ル

(一) 口徑六・一インチ（百五十五ミリメートル）ヲ超ユル砲ヲ搭載スル

(二) 口徑三インチ（七十六ミリメートル）ヲ超ユル砲ヲ四門ヲ超エ搭載スルコト

(三) 魚雷ヲ發射スル様設計セラレ又ハ裝置セラレタルコト

(四) 二十ノアトヲ超ユル速力ヲ得ル様設計セラレタルコト

(五) 裝甲板ニ依リ防護セラレタルコト

(六) 擊雷ヲ敷設スル様設計セラレ又ハ裝置セラレタルコト

(七) 中央線上ニ航空機發進装置一基ヲ又ハ各舷側ニ一基ヅツ即チ二基ヲ超エ搭載スルコト

(八) (九) (八)(七)(六)(五)(四)(三) 航空機ヲ空中ニ發進セシムル何等カノ手段ガ裝置セラレタル場合ニ三機ヲ超ユル航空機ヲ海上ニ於テ行動セシムル様設計セラレ又ハ改造セラレタルコト

萬葉集

本第二編第一附屬書ニ掲ゲラルル代換規則ハ航空母艦ヲ除クノ外其軍用機
量一萬トン(一萬百六十メートル式トン)ヲ超エザル艦船ニ之ヲ適用ス右航
空母艦ノ代換ハ「ワシントン」條約ノ規定ニ依リ規律セラル

主力盤

ノ各艦船ニシテ本條約ノ實施後締約國ニ依リ又ハ締約國ノ爲ニ起工セラレ
又ハ竣工セラレタルモノノ起工ノ日及竣工ノ日ノ後夫々一月以内ニ左記細
目事項ヲ他ノ各締約國ニ通知スベシ

(イ) 龍骨据附ノ日及左ノ細目

艦船ノ艦種別

主要寸法即チ水線全長、水線ニ於ケル又ハ水線下ノ最大幅員基準排水量ニ於ケル平均吃水

(口) 竣工ノ日及右ノ日ニ於ケル當該艦船ニ關スル前記細目
主力艦及航空母艦ニ付爲サルベキ通知ハ「ワシントン」議約ニ

九

本條約第二條ノ規定ヲ留保シ本第二編第二附屬書ニ掲ゲラルル處分規則ハ右條約ニ依リ處分セラルベキ一切ノ艦船及第三條ニ定義セラルル航空母艦ニ適用セラルベシ

111

千九百三十年四月

四 漢間 八隻 出雲 磐手及春田ハ珠磨級ノ最被ノ巡洋三隻ガ新艦船ニ
依リ代換セラレタルトキハ本第二編第二附屬書第一款又ハ第二款ニ從ヒ
處分セラルベシ右球磨級ノ艦船三隻ハ本第二編第二附屬書第五款(ロ)ニニ
規定セラルル狀態ニ減勢セラルベク且練習艦トシテ使用セラルベシ右艦
船ノトン數ハ制限ヲ附セラルルトン數中ニ爾後包含セラレザルベシ

千九百三十年四月一日前ニ固定練習用施設又ハ「ヘルク」トシテ使用セラレ
〔續二〕

タル各種ノ型式ノ現存艦船ハ航海不能ノ状態ニ於テ保有セラルルコトヲ得

第一附屬書

代換規則

第一款

本附屬書第三款及本條約第三編ニ規定セラルル所ア除クノ外一隻又ハ數隻ノ艦船ニシテ之ガ保有ノ結果當該艦種ニ付許サレタル最大限トン数ヲ超過スルニ至ルモノハ代換トン数ノ竣工又ハ取得ノ時ニ於テ本第二編第二附屬書ニ從ヒ處分セラル

第二附屬書

本條約ニ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外一隻又ハ數隻ノ艦船ニシテ之ガ保有ノ結果當該艦種ニ付許サレタル最大限トン数ヲ超過スルニ至ルモノハ代換トン数ノ竣工又ハ取得ノ時ニ於テ本第二編第二附屬書ニ從ヒ處分セラルベシ

第三款

艦船ハ亡失又ハ不慮ノ事變ニ依ル破壊ノ場合ニ於テハ直ニ代換セラルルコトヲ得

第二附屬書

本條約ハ左ノ方法ニ依リ艦船ヲ處分スルコトヲ規定ス
(一) 廉棄スルコト(沈没セシメ又ハ解體スルコト)

第三款

艦船ヲ「ハルク」ニ變更スルコト
艦船ヲ專ラ標的用ニ變更スルコト

第四款

艦船ヲ專ラ實驗用ノ爲保有スルコト
艦船ヲ專ラ練習用ノ爲保有スルコト

第五款

主力艦以外ノ處分セラルベキ何レノ艦船モ當該締約國ノ選擇ニ依リ廉棄セラルカ又ハ「ハルク」ニ變更セラルコトヲ得

主力艦以外ノ艦船ニシテ標的用、實驗用又ハ練習用ノ爲保有セラレタルモノハ終局ニ於テハ廉棄セラルカ又ハ「ハルク」ニ變更セラルベシ
(三千四十八メートル式トン)ヲ超エザル代換水上艦船ニ付テハ二年ニ短縮セラル

代換ノ權利ハ代換トン数ノ起工ノ遲延ニ依リ失ハルルコトナシ

第二款

内ニ戦闘任務ニ堪ヘザルモノト爲サルルコトヲ要ス但シ右一隻又ハ數隻ノ新艦ノ竣工ガ遅延セラレタル場合ニ於テハ舊艦ヲ戦闘任務ニ堪ヘザルモノト爲スノ作業ハ右遅延ニ拘ラズ右一隻ノ新艦又ハ數隻ノ新艦中ノ第一隻ノ龍骨ノ据附ノ日ヨリ四年半以内ニ完了セラルベシ尤モ右一隻ノ新艦又ハ數隻ノ新艦ノ何レカガ基準排水量三千トン（三千四十八メートル式トン）ヲ超エザル水上艦船ナル場合ニ於テハ右期間ハ三年半ニ短縮セラル

(ロ) 廃棄セラルベキ艦船ハ左ノ諸物件ガ撤去セラレ且陸揚セラレタルカ又ハ艦内ニ於テ破壊セラレタルトキハ戦闘任務ニ堪ヘザルモノト看做サルベシ

一切ノ砲及砲ノ主要部分、射撃指揮所竝ニ一切ノ砲塔ノ旋回部

一切ノ砲塔操作用ノ水壓機械又ハ電力機械

一切ノ射撃指揮器具及測距儀

一切ノ弾薬、爆薬、機雷及機雷敷設用軌道

一切ノ魚雷、實用頭部、魚雷發射管及發射管旋回盤用軌道

一切ノ無線電信裝置

(七) 飯 一切ノ主要推進機械又ハ之ガ代トシテ裝甲司令塔及一切ノ舷側裝甲

(八) 飯 一切ノ航空機用「クレーン」、「デリック」、昇降機及發進裝置竝ニ一切ノ航空機著艦用若ハ離艦用ノ臺及甲板又ハ此等ノ代トジテ一切ノ主

要推進機械

(九) 潜水艦ニ付テハ右ノ外一切ノ主要蓄電池、空氣壓縮裝置及「バラスト、ポンプ」

(ハ) 廃棄ハ艦船ヲ戦闘任務ニ堪ヘザルモノト爲スノ作業ノ完了期限ノ到來ノ日ヨリ十二月以内ニ左ノ方法ノ何レカニ依リ確定的ニ實行セラルベシ

(二)(一) 艦船ヲ永久ニ沈没セシムルコト

(二)(二) 艦船ヲ解體スルコト 解體ハ一切ノ機械、汽鑑及裝甲竝ニ一切ノ甲板、舷側及艦底ノ鋸ノ破壊又ハ撤去ヲ常ニ包含スベシ

第二款

「ハルク」ニ變更セラルベキ艦船

(八) 「ハルク」ニ變更スルコトニ依リ處分セラルベキ艦船ハ第一款(ロ)（六）、(七)及(八)ヲ除クニ規定セラルル條件ガ充サレ且左記方實行セラレタルトキハ確定的ニ處分セラレタルモノト看做サルベシ

(一) 一切ノ推進軸、推力承、「タービン」減速裝置又ハ推進用主電動機及主機械ノ「タービン」又ハ蒸氣笛ヲ修繕シ得ザル程度ニ損壞スルコト

(二) 推進機張出承ヲ撤去スルコト

(三) 一切ノ航空機用昇降機ヲ撤去シ且解體スルコト竝ニ一切ノ航空機用「クレーン」、「デリック」及發進裝置ヲ撤去スルコト

本艦船ハ艦船ヲ戦闘任務ニ堪ヘザルモノト爲スコトニ關シ第一款ニ於テ規定セラルル所ト同一ノ期限迄ニ前記狀態ト爲サルルコトヲ要ス

第三款

標的用ニ變更セラルベキ艦船

(イ) 専ラ標的用ニ變更スルコトニ依リ處分セラルベキ艦船ハ左記物件ガ撤去セラレ且陸揚セラレタルカ又ハ艦内ニ於テ使用不能ノモノト爲サレタルトキハ戦闘任務ニ堪ヘザルモノト看做サルベシ

期間ヲ提示スルコトヲ要ス

(ハ) 各締約國ハ專ラ實驗用ノ爲左記ヲ何時ニテモ同時ニ保有スルコトヲ許サル

(一) 二隻ヲ超エザル艦船(巡洋艦又ハ驅逐艦)但シ右二隻中一隻ニ限り基準排水量三千トン(三千四十八メートル式トン)ヲ超ユルコトヲ得

(二) 潛水艦一隻

(イ) 聯合王國ハ實驗用ノ爲ノ必要ナキニ至ル迄主砲及砲架ノ既ニ損壊セラレタル「モニター」艦「ロバーツ」並ニ水上飛行機母艦「アーヴ、ロイアル」ヲ其ノ現状ニ於テ保有スルコトヲ許サル右二隻ノ艦船ヲ保有スルコトハ前記ハニ依リ許サレタル艦船ノ保有ヲ妨グルモノニ非ズ

(ホ) 實驗用ノ爲艦船ヲ保有シタルトキハ當該締約國ハ之ヲ再ビ戰闘任務用

(ハ) 標的用ノ爲艦船ヲ保有シタルトキハ當該締約國ハ之ヲ再ビ戰闘任務用ニ變更セザルコトヲ約ス

第四款

練習用ノ爲保有セラル艦船

(イ) (イ) 專ラ實驗用ニ變更スルコトニ依リ處分セラルベキ艦船ハ本附屬書第三款イノ規定ニ從ヒ處理セラルベシ

(ロ) 一般的規則ヲ妨グルコトナク且他ノ締約國ニ適當ノ通告ガ爲サルルコトヲ條件トシ本附屬書第三款イニ規定セラル艦船トノ相當ノ相違ハ特

別ノ實驗用ノ爲必要ナルコトアルベキ範圍内ニ於テ一時の措置トシテ許サルコトヲ得

右規定ヲ利用スル何レノ締約國モ右相違ノ全細目及右相違ヲ必要トスル

(ロ) (イ) の規定ニ依リ練習用ノ爲保有セラレタル艦船ハ該艦船ガ處分セラルルコトヲ要スル日ヨリ六月以内ニ左ノ如ク處理セラルベシ

一 主力艦

左記ヲ實行スペシ

(一) 主砲、一切ノ砲塔ノ旋回部及砲塔操作用機械ノ撤去但シ砲塔三基ハ兵裝ノ儘各艦ニ存置セラルルコトヲ得

(二) 艦内ニ残存スル砲ニ射撃訓練ノ爲要スル量ヲ超ユル一切ノ彈薬及爆薬ノ撤去

(三) 司令塔竝ニ最前部及最後部ノ砲塔間ノ舷側裝甲帶ノ撤去

一切ノ魚雷發射管ノ撤去又ハ損壞

(五)(四) 最高速力十八ノットヲ得ルニ要スル數ヲ超ユル 一切ノ汽艤ノ撤去

又ハ艦内ニ於ケル損壞

二 佛蘭西國、伊太利國及日本國ニ依リ保有セラルル他ノ水上艦船

左記ヲ實行スペシ

(一) 砲ノ半數ノ撤去但シ主要口徑砲四門ハ各艦船ニ存置セラルルコトヲ得

一切ノ魚雷發射管ノ撤去

一切ノ航空用設備及附屬物件ノ撤去

(四)(三)(二) 汽艤ノ半數ノ撤去

關係締約國ハ本款ノ規定ニ依リ保有セラルル艦船ガ戰闘用ノ爲使用セラザルベキコトヲ約ス

第三附屬書

特殊艦船

合衆國

艦船ノ名及型式

排水量

機雷敷設艦

全英聯盟

	排水量	網敷設艦	二八、六四四
水上飛行機母艦	五、〇〇〇		
「アルバトロス」(「オーストラリア」)	六、七四〇 トシ	機雷敷設艦	
「アドヴェンチャ」(聯合王國)		艦船ノ名及型式	
全英聯盟			

日本國
艦船ノ名及型式

	日本國	艦船ノ名及型式	排水量	水上飛行機母艦	四、八八〇
「ミラリア」					
「ファア、ディ、ブルー」				「モニター」艦	二、八〇〇
「モンテ、グラフバ」				「モニター」艦	六〇五
「モンテルロ」				「モニター」艦	六〇五
「モンテ、チエンジオ」				前「モニター」艦	五〇〇
「モンテ、ノヴェニオ」				前「モニター」艦	五〇〇
「カンバニア」				「スループ」艦	二、〇七〇
阿蘇	搜雷敷設艦	七、一八〇			
常磐	同	九、二四〇			
淺間	老鷹巡洋艦	九、二四〇			
八雲	同	九、〇一〇			
出雲	同	九、一八〇			

第十八輯 外事 第一章 平和條約及萬國條約 第三款 萬國條約

鑄手	同	九、一八〇
春日	同	
淀	同	
砲艦	七、〇八〇	

第三編

亞米利加合衆國大統領、ダレート、ブリテン、アイルランド及グレート
ブリテン、海外領土皇帝印度皇帝陛下並ニ日本國皇帝陛下ハ相互ノ間ニ於
テ本第三編ノ規定ニ同意セリ

全英聯盟

合衆國、全英聯盟及日本國ノ海軍軍艦並船ニシテ主力艦、航空母艦及第八條ニ依リ制限ヲ免除セラレタル一切ノ艦船以外ノモノハ本第三編ニ規定セラルル所ニ從ヒ又特殊艦船ニ付テハ第十二條ニ規定セラルル所ニ從ヒ本條約ノ有效期間中制限セラルベシ

人適用二

第三編　巡洋艦　シ

(千八百

(千八百八十メートル式トン)ヲ超ユルカ又ハ口徑五・一インチ(百三十
ミリメートル)ヲ超ユル砲ヲ有スルモノ
巡洋艦艦種ハ左ノ如クニ一級ニ分タル

巡洋艦

(一) 巡洋艦

E - F - I

卷之三

卷之二

雷	驅	(乙)	(甲)	巡
水	逐	口徑六・一インチ （百五十五ミリメートル）以下ノモ ク有スルモノ	口徑六・一インチ （百五十五ミリメートル）以下ノモ ク有スルモノ	口徑六・一インチ （百五十五ミリメートル）以下ノモ ク有スルモノ
艦	艦	砲	砲	砲
シメン五 一五、七 ト三、七 ル五、〇 式四〇 ト三ト	ト〇ト一 ン〇ン五 メ一〇、 ト五〇 ト二一、〇 式四〇	ト九ト一 ン六ン四 一メ一三、 一四五〇 一トル 式七〇	ト八ト一 ン〇ン八 メ一〇、 一八二、〇 一トル 式八〇	合衆國全英聯盟日本國
シメン五 一五、七 ト三、七 ル五、〇 式四〇 ト三ト	ト〇ト一 ン〇ン五 メ一〇、 ト五〇 ト二一、〇 式四〇	ト七ト一 ン五ン九 一メ一ニ、 一九五〇 一トル 式二〇	ト四ト一 ン九ン四 メ一四九、 一ト九、〇 式一〇	
シメン五 一五、七 ト三、七 ル五、〇 式四〇 ト三ト	ト八ト一 ンハン〇 メ一五、 一ト七、〇 式一〇	ト五ト一 ン七ン〇 メ一〇、 一ト七、〇 式〇〇	ト三ト一 ン四ン八、 メ一二〇、 一ト九、〇 式一〇	

基準排水量千八百五十トン(千八百八十九メートル式トン)ヲ超エザル水上
艦船ニシテ口徑五・一インチ(百三十ミリメートル)ヲ超エザル砲ヲ有ス
ルモノ

二 騰船ニシテ何レカノ艦種ニ於ケル合計トン數ヲシテ前記ノ表ニ示サル
ル數字ヲ超過スルニ至ラシムルモノハ千九百三十六年十二月三十日ニ
終ル期間中ニ漸次處分セラルベシ

三 (甲)級巡洋艦ノ最大隻數ハ合衆國ニ付テハ十八隻、全英聯盟ニ付テハ十
五隻又日本國ニ付テハ十二隻タルベシ

四 巡逐艦種ニ於チハ割當合計トン數ノ一割六分ヲ超エザルモノハ基準
排水量千五百トン(千五百二十四メートル式トン)ヲ超ユル艦船ニ使用セ
ラルコトヲ得千九百三十年四月一日ニ於チ竣工済又ハ建造中ニシテ右
割合ヲ超ユル巡逐艦ハ保有セラルコトアリ得ルモ基準排水量千五百トン
(千五百二十四メートル式トン)ヲ超ユル他ノ巡逐艦ハ右一割六分迄ノ引
下ガ實現セラルニ至ル迄ハ建造セラレ又ハ取得セラルコトヲ得ズ

五 巡洋艦種ニ於ケル割當合計トン數ノ二割五分ヲ超エザルモノニハ航
空機著艦用ノ臺又ハ甲板ヲ裝備スルコトヲ得

六 第七條二及三ニ掲ゲラル潜水艦ハ當該締約國ノ潜水艦合計トン數ノ
一部トシテ計算セラルベキモノトス

七 本條約第十三條ニ依リ保有セラレ又ハ第二編第二附屬書ニ從ヒ處分セ
ラル艦船ノトン數ハ制限ヲ附セラルトン數中ニ包含セラルコトナ
カルベシ

第十七條

融通ヲ受ケキ艦種又ハ艦級ノ割當合計トン數ノ一割ヲ超エザル融通ハ(乙)

(甲)級巡洋艦ト驅逐艦トノ間ニ於テ許サルベシ

第二十條

第二編第一附屬書ニ掲ゲラル代換規則ニ拘ラズ
(イ)「フロビシア」及「エフィンガム」(聯合王國)ハ千九百三十六年中ニ處
分セラルコトヲ得千九百三十年四月一日ニ於チ建造中ナル巡洋艦ニ
關係ナク千九百三十六年十二月三十日以前ニ全英聯盟ニ付竣工セラル
ベキ巡洋艦ノ合計代換トン數ハ九萬千トン(九萬二千四百五十六メー

〔續二〕

トル式トン)ヲ超ユルコトヲ得ズ

代換スルコトヲ得

(ロ) 日本国ハ千九百三十六年中ニ完了セラルベキ新艦建造ニ依リ多摩フ

スルコト以外ニ日本國ハ千九百三十八年及千九百三十九年ニ「艦齡超過」ト爲ル艦船ノ一部ヲ代換スル爲千九百三十五年及千九百三十六年

ノ各年ニ於テ五千二百トン(五千二百八十三メートル式トン)ヲ超エザルトン數ヲ起工スルコトヲ得

(メ) 日本国ハ潜水艦トン數一萬九千二百トン(一萬九千五百七メートル式トン)ヲ超エザルモノヲ起工スルコトニ依リ本條約ノ有效期間中ニ

於テ代換ヲ繰上グルコトヲ得右トン數中一萬二千トン(一萬二千九十二メートル式トン)ヲ超エザルモノハ千九百三十六年十二月三十一日迄ニ竣工セラルコトヲ得

第二十一條

本條約ノ有效期間中本條約第三編ノ何レカノ締約國ニ於テ本條約第三編ニ依リ制限セラレタル艦船ニ關シ自國ノ安全ノ要件ガ本條約第三編ノ締約國

以外ノ何レカノ國ノ新艦建造ニ或リ重大ナル影響ヲ受ケタリト認タル場合ニ於テハ右締約國ハ右艦船ノ艦種中ノ一又ハ二以上ニ於テ自國ノトン數特ニ明示シテ第三編中ノ他ノ締約國ニ通告シ右增加ヲ爲スノ権利ヲ有シ右ノ結果トシテ本條約第三編中ノ他ノ締約國ハ右明示セラレタル一艦種又ハ數艦種ヲ比例的ニ増加スルノ権利ヲ有スベク且右他ノ締約國ハ右ニ依リ生ジタル事態ニ關シ外交的手段ニ依リ相互ニ速ニ協議スベシ

第四編 第二十二條

左記ハ國際法ノ確立セル規則トシテ受諾セラル

(一) 潜水艦ハ其ノ商船ニ對スル行動ニ關シテハ水上艦船ガ從フベキ國際法ノ規則ニ從フコトヲ要ス

(二) 特ニ、商船ガ正當ニ停船ヲ要求セラレタル時ニ於テ之ヲ頑強ニ拒否スルカ又ハ臨検若ハ搜索ニ對シ積極的に抗拒スル場合ヲ除クノ外軍艦ハ其ノ水上艦船タルト潛水艦タルトヲ問ハズ先づ乗客、船員及船舶書類ヲ安全ノ場所ニ置クニ非ザレバ商船ヲ沈没セシメ又ハ航海ニ堪ヘザルモノト爲スコトヲ得ズ右規定ノ適用ニ付テハ船ノ短艇ハ當該時ノ海上及天候ノ狀態ニ於テ陸地ニ近接セルコト又ハ乗客及船員ヲ船内ニ收容スルコトヲ得ル他ノ船舶ノ存在スルコトニ依リ右乗客及船員ノ安全ガ確保セラルルニ非ザレバ安全ノ場所ト看做サルルコトナシ

締約國ハ他ノ一切ノ國ニ對シ前記規則ニ其ノ同意ヲ表センコトヲ勧誘ス

第五編 第二十三條

左ノ例外ヲ留保シ本條約ハ千九百三十六年十二月三十一日ニ至ル迄引續キ效力ヲ有スベシ

(一) 第四編ハ無期限ニ引續キ效力ヲ有スベシ
(二) 第三條、第四條及第五條ノ規定竝ニ航空母艦ニ關スル限り第十一條及第二編第二附屬書ノ規定ハ「ワシントン」條約ト同一ノ期間内引續キ效力ヲ有スベシ

締約國ハ其ノ全部ガ締約國ト爲ルベキ一層一般的ナル海軍軍備制限協定ニ依リ別段ノ取極ヲ爲サザル限り本條約ニ代り且本條約ノ目的ヲ達行スル新條約ヲ作成スル爲千九百三十五年ニ會議ヲ開催スベシ但シ本條約ノ何レノ規定セ右會議ニ於ケル何レノ締約國ノ態度ヲ妨グルコトナカルベキモノトス

第二十四條

一本條約ハ締約國ニ依リ各自ノ憲法上ノ手續ニ從ヒ批准セラルベタ且批准書ハ成ルベク速ニ「ロンドン」ニ於テ寄託セラルベシ一切ノ批准書寄託調書ノ認證謄本ハ一切ノ締約國ノ政府ニ送付セラルベシ
二 亞米利加合衆國、本條約ノ前文ニ列記セラル全英聯盟ノ各邦ニ關シ「グレート、ブリテン」「アイルランド」と「グレート、ブリテン」海外領土皇帝印度皇帝陛下並ニ日本國皇帝陛下ノ批准書が寄託セラレタル時直ニ本條約ハ右締約國ニ付實施セラルベシ
三 佛蘭西共和國及伊太利王國ノ批准書が前號ニ掲ゲラル実施ノ日ニ於テ寄託済ナルトキハ本條約ノ第一編、第二編、第四編及第五編ハ右ノ日ニ於テ右兩國ニ付實施セラルベタ然ラザル場合ニ於テハ右諸編ハ右兩國ノ各ニ付其ノ批准書ノ寄託アリタル時ニ於テ實施セラルベシ
四 本條約第三編ヨリ生ズル権利及義務ハ本條ニ掲ゲラル締約國ニ局限セラル締約國ハ本條ニ掲ゲラル締約國ノ右第三編ニ依リ負擔スル義務ガ佛蘭西國及伊太利國トノ關係ニ於テ本條ニ掲ゲラル締約國ヲ拘束スル日及條件ニ關シ協定ヲ爲スベシ右協定ハ同時ニ佛蘭西國及伊太利國ノ他ノ締約國トノ關係ニ於ケル同様ノ義務ヲ決定スベシ

第二十五條

一切ノ締約國ノ批准書ノ寄託後「グレート、ブリテン」及北部「アイルランド」聯合王國ニ於ケル皇帝陛下ノ政府ハ本條約第四編ニ掲ゲラル規定ヲ右條約ノ署名國ニ非ザル一切ノ國ニ通知シテ確定的ニ且無期限ニテ右規定ニ加入スルコトヲ右一切ノ國ニ對シ勸誘スベシ
右加入ハ「グレート、ブリテン」及北部「アイルランド」聯合王國ニ於ケル皇帝陛下ノ政府ニ宛テタル宣言書ニ依リ行ハルベシ

第二十六條

本條約ハ佛蘭西語及英吉利語ノ本文ヲ以テ共ニ正文トシ「グレート、ブリテン」及北部「アイルランド」聯合王國ニ於ケル皇帝陛下ノ政府ノ記錄ニ寄託保存セラルベシ右本文ノ認證謄本ハ一切ノ締約國ノ政府ニ送付セラルベシ
右證據トシテ前記各全權委員ハ本條約ニ署名調印セリ
一千九百三十年四月二十二日「ロンドン」ニ於テ作成ス

ヘンリ、エル、スティムスン
チャールズ、ジードーズ
ジョーゼフ、ティーロビンソン
デーヴィド、エーリーード
ヒュー、ギブスン
ドワイト、ダブリュー、モロー
アリストイード、ブリアン
ジー、エル、デニメニル

神武天皇即位紀元二千五百九十年昭和五年十月二日東京宮城ニ於テ親ラ名
ヲ署シ重ヲ銘セシム

アーノ、ドウ、フルリオ (印)
ジエー、ラムジ、マクドナルド (印)
アーサー、ヘンダスン (印)
エー、ヴィー、アレグザンダー (印)
ダブリュー、ウェデヴァード、ベン (印)
フレッド、ロア (印)
ジエームズ、イー、フエンテン (印)
ティー、エム、ウイルフォード (印)
シー、ティー、ティー、ウォーター (印)
ティー、エー、スマディ (印)
アトワール、シー、チャタジー (印)
ジー、シリアンニ (印)
アーチー、ボルドナロ (印)
アルフレド、アタトン (印)

若槻禮次郎 (印)
財部 勝 (印)
松平 恒雄 (印)
永井 松三 (印)

昭和六年一月一日
外務省告示第一號

昭和五年四月二十二日「ロンドン」ニ於テ署名セラレタル「千九百三十年「ロ
ンドン」海軍條約」ニ對スル帝國ノ批准書ハ亞米利加合衆國及全英聯盟(「ア
イルランド」自由國ヲ除ク)ノ批准書ト共ニ昭和五年十月二十七日「ロンド
ン」ニ於テ寄託セラレタリ

昭和六年一月一日
外務省告示第二號

昭和五年四月二十二日「ロンドン」ニ於テ署名セラレタル「千九百三十年「ロ
ンドン」海軍條約」ニ對スル「アイルランド」自由國ノ批准書ハ昭和五年十二
月三十一日「ロンドン」ニ於テ寄託セラレタリ依テ本條約ハ右寄託ト同時ニ
帝國、亞米利加合衆國及全英聯盟ニ付實施セラルルニ至レリ

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ賤メル日本國皇帝(御名)此ノ書ヲ見ル有衆
ニ宣示ス
昭和五年四月二十二日「ロンドン」ニ於テ帝國全權委員ガ亞米利加合衆
國、英帝國、佛蘭西國及伊太利國ノ全權委員ト共ニ署名調印シタル千九百
三十年「ロンドン」海軍條約ヲ閱覽點檢シ之ヲ嘉納批准ス



「ロンドンニ海軍條約第四編ニ掲ゲラルル規
則ニ非署名國ノ加入方勸誘ニ關スル件
右謹テ裁可ヲ仰ク」

昭和十一年十月十三日

内閣總理大臣廣田弘毅



外甲 九一

十月十三日裁可

昭和十一年十月十日

内閣書記官長



内閣書記官



内閣總理大臣

法制局長官



外務大臣

立

陸軍大臣

五

文部大臣

十

遞信大臣

原

内務大臣

五

海軍大臣

汝

農林大臣

五

鐵道大臣

島

大藏大臣

銭

司法大臣

西

商工大臣

五

拓務大臣

益

別紙外務大臣請議
ヨーロンドンレ海軍條約第四編
ニ掲ゲラルル規則ニ非署名國ノ加入方勸誘ニ關
スル件ヲ審査スルニ右ハ相當ノ儀ト思考ス依

テ請議ノ通閣議決定裁可ヲ奏請セラレ可然
ト認ム

指 令 案

「ロンドン、海軍條約第四編ニ掲タルル規則ニ
非署名國ノ加入方、勸誘ニ關スル件上奏ノ通
裁可ヲ經タリ」

十月十四日指令

本件ハ上奏既可後添附ニシテナ

法制局外事シニヤ

拾月八日

主任者 條約局第一課長

條一機密第六四五號

昭和十一年十月七日

外務大臣 有田 八

内閣總理大臣 廣田 弘毅 殿

「ロンドン」海軍條約第四編ニ掲ゲラルル規則ニ
非署名國ノ加入方勸誘ニ關スル件

昭和五年四月二十二日「ロンドン」ニ於テ署名セラレタル海軍條約
ハ第四編（第二十二條）ニ於テ同編記載ノ商船ニ對スル潛水艦ノ行
動ニ關スル規定ガ國際法ノ確立セル規則トシテ受諾セラルル旨ヲ述
べタル後「締約國ハ他ノ一切ノ國ニ對シ前記規則ニ其ノ同意ヲ表セ

ンコトヲ勧誘ス」ト規定シ更ニ第二十五條ニ於テ同條約締約國ノ全
 部ガ其ノ批准書ヲ寄託シタル後英國政府ハ右規則ヲ同條約ノ非署名
 國タル一切ノ國ニ通知シテ右規則ニ對スル加入ヲ勧誘スペキ旨ヲ規
 定セリ然ルニ佛伊兩國ハ前記海軍條約ヲ批准セザル爲英國政府ハ今
 日迄本件勸誘ノ措置ヲ執ラザリシ處今般佛伊兩國ハ前記第四編ニ掲
 グル規則受諾ノ意思ヲ確言シタルニ鑑ミ關係國ハ右規則ニ加入方ヲ
 同條約ノ非署名國ニ對シ勸誘センコトヲ英國政府ニ要請スルコトニ
 決シ其ノ趣旨ノ調書ヲ作成ノ上關係國代表者之ニ署名スルコトト相
 成候ニ付テハ在英帝國特命全權大使ヲシテ之ニ署名セシムルコトト
 致度候條右閣議御決定相成度御決定ノ上ハ御裁可奏請方可然御取計
 相成度別紙上奏案相添ヘ此段及請議候也

追テ調書案原文及譯文各二部添附致置候

は(イ)

昭和五年四月二十二日「ロンドン」ニ於テ署名セラレタル海軍條約
第四編ニ掲ゲラルル規則ニ同條約非署名國ノ加入方勸誘ニ關スル調
書ニ在英帝國特命全權大使ヲシテ署名セシムル件御裁可アラセラレ
候様仕度此段謹デ奏ス

昭和十一年十月七日

外務大臣 有田 八



調書

は(イ)

千九百三十年四月二十二日「ロンドン」ニ於テ署名セラレタル海軍軍備ノ制限及縮少ニ關スル條約ハ一切ノ署名國ニ依リテハ批准セラレ居ラザルニ因リ

右條約ハ國際法ノ確立セル規則ナリトシテ商船ニ對スル潛水艦ノ行動ニ關スル規則ヲ掲ゲ且無期限ニ引續キ效力ヲ有スペキ第四編ヲ除クノ外ハ千九百三十六年十二月三十一日後效力ヲ有セザルニ至ルニ因リ

右第四編ノ第二十二條末項ハ締約國ガ他ノ一切ノ國ニ對シ前記規則ニ其ノ同意ヲ表センコトヲ勸誘スト記スニ因リ

佛蘭西共和國及伊太利王國ノ政府ハ右條約ノ署名ヨリ發生スル前記規則ノ受諾ヲ確認シタルニ因リ
且右條約ノ一切ノ署名國ハ成ルベク多數ノ國ガ前記第四編ニ掲ゲラルル規則ヲ國際法ノ確立セル規則トシテ受諾センコトヲ希望スルニ

各自ノ政府ノ代表者タル下名ハ右條約第二十二條ヲ顧念シ「グレート、ブリテン」及北部「アイルランド」聯合王國ニ於ケル皇帝陛下ノ政府ニ對シ、茲ニ添附ノ前記規則ヲ確定的ニ且無期限ニテ之ニ加入セシコトノ勸誘ヲ添ヘテ右條約ノ署名國ニ非ザル一切ノ國ノ政府ニ直ニ通知セシコトヲ茲ニ要請ス

規則

- (一) 潛水艦ハ其ノ商船ニ對スル行動ニ關シテハ水上艦船ガ從フベキ國際法ノ規則ニ從フコトヲ要ス
- (二) 特ニ、商船ガ正當ニ停船ヲ要求セラレタル時ニ於テ之ヲ頑強ニ拒否スルカ又ハ臨檢若ハ搜索ニ對シ積極的ニ抗拒スル場合ヲ除クノ外軍艦ハ其ノ水上艦船タルト潛水艦タルトヲ問ハス先ツ乗客、船員及船舶書類ヲ安全ノ場所ニ置クニ非ザレバ商船ヲ沈没セシメ

は(イ)

又ハ航海ニ堪ヘザルモノト爲スコトヲ得ズ右規定ノ適用ニ付テハ
船ノ短艇ハ當該時ノ海上及天候ノ狀態ニ於テ陸地ニ近接セルコト
又ハ乗客及船員ヲ船内ニ收容スルコトヲ得ル他ノ船舶ノ存在スル
コトニ依リ右乗客及船員ノ安全ガ確保セラルルニ非ザレバ安全ノ
場所ト看做サルルコトナシ

千九百三十六年 月 日「ロンドン」ニ於テ署名ス

COPY

PROCES-VERBAL.

Whereas the Treaty for the Limitation and Reduction of Naval Armaments signed in London on the 22nd April, 1930, has not been ratified by all the signatories;

And whereas the said Treaty will cease to be in force after the 31st December, 1936, with the exception of Part IV thereof, which sets forth rules as to the action of submarines with regard to merchant ships as being established rules of International Law, and remains in force without limit of time;

And whereas the last paragraph of Article 22 in the said Part IV states that the High Contracting Parties invite all other Powers to express their assent to the said rules;

And whereas the Governments of the French Republic and the Kingdom of Italy have confirmed their acceptance of the said rules resulting from the signature of the said Treaty;

And whereas all the signatories of the said Treaty desire that as great a number of Powers as possible should accept the rules contained in the said Part IV as established rules of International Law;

The undersigned, representatives of their respective Governments, bearing in mind the said Article 22 of the Treaty, hereby request the Government of the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland forthwith to communicate the said rules, as annexed hereto, to the Governments of all the Powers which are not signatories of the said Treaty,

with

with an invitation to accede thereto definitely and without limit of time.

Rules

"(1) In their action with regard to merchant ships, submarines must conform to the rules of International Law to which surface vessels are subject.

(2) In particular, except in the case of persistent refusal to stop on being duly summoned, or of active resistance to visit or search, a warship, whether surface vessel or submarine, may not sink or render incapable of navigation a merchant vessel without having first placed passengers, crew and ship's papers in a place of safety. For this purpose the ship's boats are not regarded as a place of safety unless the safety of the passengers and crew is assured, in the existing sea and weather conditions, by the proximity of land, or the presence of another vessel which is in a position to take them on board."

Signed in London, the day of nineteen
hundred and thirty-six.

参照

千九百三十年 ロンドン海軍條約

昭和六年一月
條約第一號

第四編

第二十二條

左記ハ國際法ノ確立セル規則トシテ受諾セ

ラル

(一) 潜水艦ハ其ノ商船ニ對スル行動ニ關

シテハ水上艦船ガ從フベキ國際法ノ規

則ニ從フコトヲ要ス

(二) 特ニ、商船ガ正當ニ停船ヲ要求セラ

レタル時ニ於テ之ヲ頑強ニ拒否スルカ

又ハ臨檢若ハ搜索ニ對シ積極的ニ抗拒

スル場合ヲ除クノ外軍艦ハ其ノ水上艦

船タルト潜水艦タルトヲ間ハズ先ヅ乗

客、船員及船舶書類ヲ安全ノ場所ニ置

クニ非ザレバ商船ヲ沈没セシメ又ハ航

海ニ堪ヘザルモノト爲スコトヲ得ズ右

規定ノ適用ニ付テハ船ノ短艇ハ當該時

ノ海上及天候ノ狀態ニ於テ陸地ニ近接

セルコトヲ得ル他ノ船舶ノ存在スルコ

トニ依リ右乗客及船員ノ安全ガ確保セ

ラルニ非ザレバ安全ノ場所ト看做サ

内

閣

ルルコトナシ

締約國ハ他ノ一切ノ國ニ對シ前記規則ニ其
ノ同意ヲ表セシコトヲ勸誘ス

第五編

第二十三條

左ノ例外ヲ留保シ本條約ハ千九百三十六年
十二月三十一日ニ至ル迄引續キ效力ヲ有ス
ベシ

(一) 第四編ハ無期限ニ引續キ效力ヲ有ス
ベシ

(二) 第三條、第四條及第五條ノ規定竝ニ
航空母艦ニ關スル限り第十一條及第二
編第二附屬書ノ規定ハ「ワシントン」條
約ト同一ノ期間内引續キ效力ヲ有スベ
シ

締約國ハ其ノ全部ガ締約國ト爲ルベキ一層
一般的ナル海軍軍備制限協定ニ依リ別段ノ
取極ヲ爲サザル限り本條約ニ代リ且本條約
ノ目的ヲ遂行スル新條約ヲ作成スル爲千九
百三十五年ニ會議ヲ開催スペシ但シ本條約

ノ何レノ規定モ右會議ニ於ケル何レノ締約

國ノ態度ヲモ妨グルコトナカルベキモノトス

第二十四條

一 本條約ハ締約國ニ依リ各自ノ憲法上ノ手續ニ從ヒ批准セラルベク且批准書ハ成ルベク速ニ「ロンドン」ニ於テ寄託セラルベシ一切ノ批准書寄託調書ノ認證謄本ハ一切ノ締約國ノ政府ニ送付セラルベシ

二 亞米利加合衆國、本條約ノ前文ニ列記セラル全英聯盟ノ各邦ニ關シ「グレー
ト、ブリテン」「アイルランド」及「グレー
ト、ブリテン」海外領土皇帝印度皇帝陛下
竝ニ日本國皇帝陛下ノ批准書ガ寄託セラ
レタル時直ニ本條約ハ右締約國ニ付實施セラルベシ

三 佛蘭西共和國及伊太利王國ノ批准書ガ
前號ニ掲ゲラルル實施ノ日ニ於テ寄託濟
ナルトキハ本條約ノ第一編、第二編、第四
編及第五編ハ右ノ日ニ於テ右兩國ニ付實
施セラルベク然ラザル場合ニ於テハ右諸
編ハ右兩國ノ各ニ付其ノ批准書ノ寄託ア

リタル時ニ於テ實施セラルベシ

第二十六條

四 本條約第三編ヨリ生ズル権利及義務ハ
本條ニ掲ゲラルル締約國ニ局限セラル
締約國ハ本條ニ掲ゲラルル締約國ノ右
第三編ニ依リ負擔スル義務ガ佛蘭西國及
伊太利國トノ關係ニ於テ本條ニノ締約國
ヲ拘束スル日及條件ニ關シ協定ヲ爲スベ
シ右協定ハ同時ニ佛蘭西國及伊太利國ノ
他ノ締約國トノ關係ニ於ケル同様ノ義務
ヲ決定スベシ

第二十五條

一切ノ締約國ノ批准書ノ寄託後「グレー
ト、ブリテン」及北部「アイルランド」聯合王國
ニ於ケル皇帝陛下ノ政府ハ本條約第四編ニ
掲ゲラルル規定ヲ右條約ノ署名國ニ非ザル
一切ノ國ニ通知シテ確定的ニ且無期限ニテ
右規定ニ加入スルコトヲ右一切ノ國ニ對シ
勸誘スベシ

右加入ハ「グレー、ト、ブリテン」及北部「アイ
ルランド」聯合王國ニ於ケル皇帝陛下ノ政

本條約ハ佛蘭西語及英吉利語ノ本文ヲ以テ
共ニ正文トシ「グレー、ト、ブリテン」及北部
「アイルランド」聯合王國ニ於ケル皇帝陛下
ノ政府ノ記錄ニ寄託保存セラルベシ右本文
ノ認證謄本ハ一切ノ締約國ノ政府ニ送付セ
ラルベシ

右證據トシテ前記各全權委員ハ本條約ニ署
名調印セリ

千九百三十年四月二十二日「ロンドン」ニ於
テ作成ス

ヘンリ、エル、スティムスン
チャーレズ、ジー、ドートズ
チャールズ、エフ、アダムズ
ジョーゼフ、ティー、ロビンソン
デーヴィド、エー、リード
ピュー、ギブスン
ドワイト、ダブリュー、モロー
(印)

「ロンドン」海軍條約第四編ニ關スル「プロセヴ
エルバル」ニ付テ

は(イ)

一九三〇年「ロンドン」海軍條約第二十五條第一項ハ一切ノ締約國
力同條約ノ批准書ヲ寄託シタル後英國政府ハ同條約ノ署名國ニ非サ
ル一切ノ國ニ對シ同條約第四編（第二十二條）ニ掲ケラレタル潛水
艦使用ノ制限ニ關スル規則ヲ通知シ之ニ加入方ヲ勸誘スヘキコトヲ
規定シ居レリ、同條約ハ日、英、米ノ三國間ニハ既ニ實施セラレ居
ルモ佛、伊ノ未批准ナル事情ヲ考慮シ英國政府ハ未タ右勸誘ノ措置
ヲ執ルニ至ラサリキ、然ルニ同條約ハ第四編ヲ除キ本年末ヲ以テ失
効スルコトトナリ居リ右失効期モ差迫リタルニ鑑ミ且一方佛、伊兩
國力前記第四編ノ規則ヲ受諾スルノ意思アルコト明カトナリタルニ
モ顧ミ關係國ハ今般本件「プロセヴエルバル」ニ依リ英國政府ニ對
シ右勸誘ノ措置ヲ執ランコトヲ要請スルコトトナレリ

惟フニ本件「プロセヴエルバル」ハ「ロンドン」條約ニ豫見セザル
 新ナル國際義務ヲ課スルモノニ非ズシテ單ニ同條約ノ適用ニ關スル
 モノナリ、蓋シ本件「プロセヴエルバル」ノ主眼トスルハ一切ノ非
 署名國ニ對シ前記規則ノ受諾ヲ勸誘スルコト及英國政府ヲシテ締約
 國政府ニ代リ右勸誘ヲ行ハシムルコトノ二點ニ存スル處、右二點ハ
 何レモ「ロンドン」條約第二十二條末項及第二十五條第一項ノ夫々
 既ニ規定スル所ヲ其ノ儘適用セントスルモノナレバナリ、右ハ同條
 約力第二十四條二ノ規定ニ依リ日、英、米三國ノ間ニ實施セラレ居
 ル今日右三國間ニハ問題トナルノ余地ナシ
 問題トナリ得ルハ未批准國タル佛、伊兩國ヲ本件「プロセヴエルバ
 ル」ノ署名ニ參加セシムルノ點ナルモ、佛、伊兩國ガ本件「プロセ
 ヴエルバル」ニ署名スルコトハ兩國ガ第二十二條ノ規則ニ同意ヲ表
 スルモノナルト共ニ兩國ノ未批准ニ拘ラス英國政府ニ於テ前記勸誘
 ノ措置ヲ執リ差支ナシトノ意思ヲ一方的ニ表示スルモノニシテ、固

ヨリ之ニ依リ日、英、米三國ニ新ナル義務ヲ課スルモノニ非ス從テ
右三國ノ條約上ノ地位ニ何等變更ヲ生セシムルコトナシ
上記ノ如ク本件「ブロセヴエルバル」ハ「ロンドン」條約ニ豫見セ
サル國際義務ヲ伴フ新約束ヲ締結スルモノニ非ス同條約ノ單ナル適用問題ナルヲ以テ、本件「ブロセヴエルバル」ハ之ヲ國際約束トシ
テ樞密院ニ御諮詢方奏請ノ要ナキモノト認メラル
尙本件「ブロセヴエルバル」ニ在英帝國特命全權大使ヲシテ署名セ
シムルコトニ付テハ御裁可ヲ仰ク方針ナリ

外甲一〇八

昭和十一年十一月二十五日

内閣書記官長



内閣書記官

昭和十一年十一月二十八日公布
昭和十一年十一月二十七日裁可

内閣總理大臣 三

法制局長官

外務大臣

立

陸軍大臣

五

内務大臣

五

海軍大臣

五

文部大臣

十

遞信大臣

屏

農林大臣

五

鐵道大臣

ち

商工大臣

五

拓務大臣

壹

大藏大臣

立

司法大臣

五

別紙外務大臣請議曰獨協定公布方
件ヲ審査スルニ右ハ相當ノ儀ト思
考ス依テ請議ノ通條約公布ノコ

トニ閣議決定セラレ可然ト認ム

條約公布案

呈案ノ通



法
制
局

號外

昭和十一年十一月二十五日

外務大臣 有田 八郎

内閣總理大臣 廣田 弘毅 殿

日獨協定公布方ノ件

日本國獨逸國間共產「インターナショナル」ニ對スル協定及其ノ附屬議定書近ク署名ノ運トナルベク右協定及附屬議定書ハ署名ノ日ヨリ實施ノコトト相成居候ニ付テハ右署名濟ノ節ハ至急官報ヲ以テ公布方可然御取計相成度公布案相添ヘ此段及請議候也

追テ署名濟ノ節ハ其ノ旨署名ノ年月日、署名振等ト共ニ直ニ通報



は(イ)

外
一
八

外務省

ニ及ブベク候

尙公文案文書左記ノ通ニ有之候

一上諭文案

ニ共産「インターナショナル」ニ對スル協定及其ノ附屬議定書

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ裁可シ昭和十一年十一月二十五日「ペルリ
ン」ニ於テ帝國特命全權大使ガ獨逸國全權委員ト共ニ署名シタル共
產「インターナショナル」ニ對スル協定及其ノ附屬議定書ヲ茲ニ公

布セシム

御名御璽

昭和十一年十一月二十七日

内閣總理大臣

外務大臣

條約第八號

共產「インターナショナル」ニ對スル協定

大日本帝國政府及

獨逸國政府ハ

共產「インターナショナル」（所謂「コミニンテルン」）ノ目的ガ其ノ執り得ル有ラユル手段ニ依ル、現存國家ノ破壊及暴壓ニ在ルコトヲ認メ

共產「インターナショナル」ノ諸國ノ國內關係ニ對スル干渉ヲ看過スルコトハ其ノ國內ノ安寧及社會ノ福祉ヲ危殆ナラシムルノミナラズ世界平和全般ヲ脅スモノナルコトヲ確信シ
共產主義的破壊ニ對スル防衛ノ爲協力セシコトヲ欲シ左ノ通協定セリ

第一條

締約國ハ共產「インターナショナル」ノ活動ニ付相互ニ通報シ、必要ナル防衛措置ニ付協議シ且
緊密ナル協力ニ依リ右ノ措置ヲ達成スルコトヲ約ス

第二條

締約國ハ共產「インターナショナル」ノ破壊工作ニ依リテ國內ノ安寧ヲ脅サルル第三國ニ對シ本

協定ノ趣旨ニ依ル防衛措置ヲ執リ又ハ本協定ニ參加セシコトヲ共同ニ勸誘スベシ

第三條

本協定ハ日本語及獨逸語ノ本文ヲ以テ正文トス本協定ハ署名ノ日ヨリ實施セラルベク且五年間效力ヲ有ス締約國ハ右期間滿了前適當ノ時期ニ於テ爾後ニ於ケル兩國協力ノ態様ニ付了解ヲ遂グベシ

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本協定ニ署名調印セリ

昭和年月日即チ千九百 年月日「ベルリン」

ニ於テ本書二通ヲ作成ス

大日本帝國特命全權大使

獨逸國特命全權大使

共産「インターナショナル」ニ對スル協定ノ附屬議定書

本日共産「インターナショナル」ニ對スル協定ニ署名スルニ當リ下名ノ全權委員ハ左ノ通協定セ

リ

(イ) 兩締約國ノ當該官憲ハ共産「インターナショナル」ノ活動ニ關スル情報ノ交換並ニ共産「インターナショナル」ニ對スル啓發及防衛ノ措置ニ付緊密ニ協力スベシ

(ロ) 兩締約國ノ當該官憲ハ國內又ハ國外ニ於テ直接又ハ間接ニ共産「インターナショナル」ノ勤務ニ服シ又ハ其ノ破壊工作ヲ助長スル者ニ對シ現行法ノ範圍内ニ於テ嚴格ナル措置ヲ執ルベシ

(ハ) 前記(イ)ニ定メラレタル兩締約國ノ當該官憲ノ協力ヲ容易ナラシムル爲常設委員會設置セラルベシ共産「インターナショナル」ノ破壊工作防遏ノ爲必要ナル爾餘ノ防衛措置ハ右委員會ニ於テ考究且協議セラルベシ

昭和 年 月 日即チ千九百 年 月 日「ベルリン」
ニ於テ

大日本帝國特命全權大使
獨逸國特命全權大使

右記文書

ABKOMMEN GEGEN DIE KOMMUNISTISCHE INTERNATIONALE.

DIE REGIERUNG DES DEUTSCHEN REICHES
UND
DIE KAISERLICH-JAPANISCHE REGIERUNG

In der Erkenntnis, dass das Ziel der Kommunistischen Internationale, Komintern genannt, die Zersetzung und Vergewaltigung der bestehenden Staaten mit allen zu Gebote stehenden Mitteln ist,

In der Überzeugung, dass die Duldung einer Einmischung der Kommunistischen Internationale in die inneren Verhältnisse der Nationen nicht nur deren inneren Frieden und soziales Wohlleben gefährdet, sondern auch den Weltfrieden überhaupt bedroht,

Sind in dem Wunsche, gemeinsam zur Abwehr gegen die kommunistische Zersetzung zusammenzuarbeiten, in folgendem übereingekommen :

Artikel I

Die Hohen Vertragschliessenden Staaten kommen überein, sich gegenseitig über die Tätigkeit der Kommunistischen Internationale zu unterrichten, über die notwendigen Abwehrmassnahmen zu beraten und diese in enger Zusammenarbeit durchzuführen.

Artikel II

Die Hohen Vertragschliessenden Staaten werden dritte Staaten,

deren innerer Friede durch die Zersetzungarbeit der Kommunistischen Internationale bedroht wird, gemeinsam einladen, Abwehrmassnahmen im Geiste dieses Abkommens zu ergreifen oder an diesem Abkommen teilzunehmen.

Artikel III

Für dieses Abkommen gelten sowohl der deutsche wie auch der japanische Text als Urschrift. Es tritt am Tage der Unterzeichnung in Kraft und gilt für die Dauer von fünf Jahren. Die Hohen Vertragschliessenden Staaten werden sich rechtzeitig vor Ablauf dieser Frist über die weitere Gestaltung ihrer Zusammenarbeit verständigen.

Zu Urkund dessen haben die Unterzeichneten, von ihren betreffenden Regierungen gut und richtig bevollmächtigt, dieses Abkommen unterzeichnet und mit ihren Siegeln versehen.

So geschehen in zweifacher Ausfertigung

zu Berlin, den ten 19 ,
d. h. den ten des ten Jahres der
Showa-Periode.

Ausserordentlicher und Bevollmächtigter
Botschafter des Deutschen Reiches

Kaiserlich-Japanischer Ausserordentlicher
und Bevollmächtigter Botschafter

ZUSATZPROTOKOLL ZUM ABKOMMEN GEGEN DIE KOMMUNISTISCHE
INTERNATIONALE.

Anlässlich der heutigen Unterzeichnung des Abkommens gegen die Kommunistische Internationale sind die unterzeichneten Bevollmächtigten in folgendem übereingekommen:

- a) Die zuständigen Behörden der beiden Hohen Vertragschliessenden Staaten werden in bezug auf den Nachrichtenaustausch über die Tätigkeit der Kommunistischen Internationale sowie auf die Aufklärungs- und Abwehrmassnahmen gegen die Kommunistische Internationale in enger Weise zusammenarbeiten.
- b) Die zuständigen Behörden der beiden Hohen Vertragschliessenden Staaten werden im Rahmen der bestehenden Gesetze strenge Massnahmen gegen diejenigen ergreifen, die sich im Inland oder Ausland direkt oder indirekt im Dienste der Kommunistischen Internationale betätigen oder deren Zersetzungarbeit Vorschub leisten.
- c) Um die in a) festgelegte Zusammenarbeit der zuständigen Behörden der beiden Hohen Vertragschliessenden Staaten zu erleichtern, wird eine ständige Kommission errichtet werden. In dieser Kommission werden die weiteren zur Bekämpfung der Zersetzungarbeit der Kommunistischen Internationale notwendigen Abwehrmassnahmen erwogen und beraten.

— 4 —

Berlin, den.....ten.....19 ,

d. h. den ten des ten Jahres der
Showa-Periode.

Ausserordentlicher und Bevollmächtigter
Botschafter des Deutschen Reiches

Kaiserlich-Japanischer Ausserordentlicher
und Bevollmächtigter Botschafter

極
私

條一機密第八二九號

昭和十一年十一月二十六日

外務次官 堀内謙

内閣書記官長 藤沼平殿



日獨協定公布方ノ件

本件ニ關シテハ有田外務大臣ヨリ廣田内閣總理大臣宛昭和十一年十一月二十五日附號外公信ヲ以テ申進ノ次第有之タル處本件協定及附屬議定書ハ本月二十五日署名調印ヲ了シタルニ付前記公信添附ノ協定及附屬議定書ニ左記ノ通御記入ノ上至急公布方御取計相煩度記入済ノモノ添附此段申進候也

記

「協定日本文ノ年月日及署名振左ノ通

昭和十一年十一月二十五日即チ千九百三十六年十一月二十五日「ベルリン」ニ於テ本書二通ヲ作成ス

大日本帝國特命全權大使 子爵 武者 小路 公共（印）

獨逸國特命全權大使 ヨアヒム・フォン・リッベントロップ（印）

「附屬議定書日本文ノ年月日及署名振左ノ通

昭和十一年十一月二十五日即チ千九百三十六年十一月二十五日「ベルリン」ニ於テ

大日本帝國特命全權大使 子爵 武者 小路 公共（印）

獨逸國特命全權大使 ヨアヒム・フォン・リッベントロップ（印）

「協定獨逸文ノ年月日及署名振左ノ通

zu Berlin, den 25ten November 1936,

d.h. den 25ten November des llten Jahres der

Showa-Periode.

附 (二)

(L.S.) Joachim von Ribbentrop
Ausserordentlicher und Bevollmächtigter
Botschafter des Deutschen Reiches
(L.S.) Vicomte Kintomo Mushakoji
Kaiserlich-Japanischer Ausserordentlicher
und Bevollmächtigter Botschafter

日 本 外 交 及 諸 名 振 左 一 潤

Berlin, den 25ten November 1936,
d.h. den 25ten November des 11ten
Jahres der Showa-Periode.

(L.S.) Joachim von Ribbentrop
Ausserordentlicher und Bevollmächtigter
Botschafter des Deutschen Reiches

(L.S.) Vicomte Kintomo Mushakoji

Kaiserlich-Japanischer Ausserordentlicher
und Bevollmächtigter Botschafter

正 (一)

條約第 驟

共産「インターナショナル」ニ對スル協定

大日本帝國政府及

獨逸國政府ハ

共産「インターナショナル」（所謂「コミニテルン」）ノ目的ガ其ノ執リ得ル有ラユル手段ニ依ル現存國家ノ破壊及暴壓ニ在ルコトヲ認メ

共産「インターナショナル」ノ諸國ノ國內關係ニ對スル干渉ヲ看過スルコトハ其ノ國內ノ安寧及社會ノ福祉ヲ危殆ナラシムルノミナラズ世界平和全般ヲ脅スモノナルコトヲ確信シ共產主義的破壊ニ對スル防衛ノ爲協力センコトヲ欲シ左ノ通協定セリ

第一條

締約國ハ共産「インターナショナル」ノ活動ニ付相互ニ通報シ、必要ナル防衛措置ニ付協議シ且緊密ナル協力ニ依リ右ノ措置ヲ達成スルコトヲ約ズ

第二條

締約國ハ共産「インターナショナル」ノ破壊工作ニ依リテ國內ノ安寧ヲ脅サルル第三國ニ對シ本

四

大日本帝國特命全權大使 子爵 武 者 小 路 公 共 (印)
獨逸國特命全權大使 ヨアヒム・フォン・リーベントロップ (印)

Berlin, den 25ten November 1936,
d. h. den 25ten November des 11ten Jahres der
Showa-Periode.

(L. S.) Joachim von Ribbentrop

Ausserordentlicher und Bevollmächtigter
Botschafter des Deutschen Reiches

(L. S.) Vicomte Kintomo Mushakoji

Kaiserlich-Japanischer Ausserordentlicher
und Bevollmächtigter Botschafter

ZUSATZPROTOKOLL ZUM ABKOMMEN GEGEN DIE KOMMUNISTISCHE
INTERNATIONALE.

Anlässlich der heutigen Unterzeichnung des Abkommens gegen die Kommunistische Internationale sind die unterzeichneten Bevollmächtigten in folgendem übereingekommen:

- a) Die zuständigen Behörden der beiden Hohen Vertragschliessenden Staaten werden in bezug auf den Nachrichtenaustausch über die Tätigkeit der Kommunistischen Internationale sowie auf die Aufklärungs- und Abwehrmassnahmen gegen die Kommunistische Internationale in enger Weise zusammenarbeiten.
- b) Die zuständigen Behörden der beiden Hohen Vertragschliessenden Staaten werden im Rahmen der bestehenden Gesetze strenge Massnahmen gegen diejenigen ergreifen, die sich im Inland oder Ausland direkt oder indirekt im Dienste der Kommunistischen Internationale betätigen oder deren Zersetzungarbeit Vorschub leisten.
- c) Um die in a) festgelegte Zusammenarbeit der zuständigen Behörden der beiden Hohen Vertragschliessenden Staaten zu erleichtern, wird eine ständige Kommission errichtet werden. In dieser Kommission werden die weiteren zur Bekämpfung der Zersetzungarbeit der Kommunistischen Internationale notwendigen Abwehrmassnahmen erwogen und beraten.

deren innerer Friede durch die Zersetzungarbeit der Kommunistischen Internationale bedroht wird, gemeinsam einladen, Abwehrmassnahmen im Geiste dieses Abkommens zu ergreifen oder an diesem Abkommen teilzunehmen.

Artikel III

Für dieses Abkommen gelten sowohl der deutsche wie auch der japanische Text als Urschrift. Es tritt am Tage der Unterzeichnung in Kraft und gilt für die Dauer von fünf Jahren. Die Hohen Vertragschliessenden Staaten werden sich rechtzeitig vor Ablauf dieser Frist über die weitere Gestaltung ihrer Zusammenarbeit verständigen.

Zu Urkund dessen haben die Unterzeichneten, von ihren betreffenden Regierungen gut und richtig bevollmächtigt, dieses Abkommen unterzeichnet und mit ihren Siegeln versehen.

So geschehen in zweifacher Ausfertigung

zu Berlin, den 25ten November 1936,
d. h. den 25ten November des 11ten Jahres der
Showa-Periode.

(L. S.) Joachim von Ribbentrop

Ausserordentlicher und Bevollmächtigter
Botschafter des Deutschen Reiches

(L. S.) Vicomte Kintomo Mushakoji

Kaiserlich-Japanischer Ausserordentlicher
und Bevollmächtigter Botschafter

大日本帝国

ABKOMMEN GEGEN DIE KOMMUNISTISCHE INTERNATIONALE.

DIE REGIERUNG DES DEUTSCHEN REICHES
UND
DIE KAISERLICH-JAPANISCHE REGIERUNG

In der Erkenntnis, dass das Ziel der Kommunistischen Internationale, Komintern genannt, die Zersetzung und Vergewaltigung der bestehenden Staaten mit allen zu Gebote stehenden Mitteln ist,

In der Überzeugung, dass die Duldung einer Einmischung der Kommunistischen Internationale in die inneren Verhältnisse der Nationen nicht nur deren inneren Frieden und soziales Wohlleben gefährdet, sondern auch den Weltfrieden überhaupt bedroht,

Sind in dem Wunsche, gemeinsam zur Abwehr gegen die kommunistische Zersetzung zusammenzuarbeiten, in folgendem übereingekommen:

Artikel I

Die Hohen Vertragschliessenden Staaten kommen überein, sich gegenseitig über die Tätigkeit der Kommunistischen Internationale zu unterrichten, über die notwendigen Abwehrmassnahmen zu beraten und diese in enger Zusammenarbeit durchzuführen.

Artikel II

Die Hohen Vertragschliessenden Staaten werden dritte Staaten,

澤



帝國一千九百三十年倫敦海軍條約所定量
超過潛水艦保有問題ニ關スル件

右謹テ裁可ヲ仰ク

昭和十一年十二月十八日

内閣總理大臣廣田弘毅



外甲第一二八號

案起昭和十一年十二月十七日

裁可昭和十一年十二月十八日

決定昭和年月日行昭和十一年十二月十九日

指令

內閣總理大臣

內閣書記官長



內閣書記官



外務大臣

立

陸軍大臣

五

文部大臣

五

遞信大臣

臣

鐵道大臣

内務大臣

五

海軍大臣

少

農林大臣

五

拓務大臣

臣

商工大臣

五

鐵道大臣

臣

鐵道大臣

別紙外務海軍兩大臣請議

帝國一千九百三十年倫敦海軍條

四

月

約所定量超過潛水艦保有問題

二 関スル件

右閣議ニ供ス

指 令 案

帝國一千九百三十年倫敦海軍條約所
定量超過潛水艦保有問題ニ關スル件
請議，通

歐二機密第九二五號

昭和十一年十二月十七日

海軍大臣 永野修身

外務大臣 有田八

内閣總理大臣 廣田弘毅殿

帝國ノ千九百三十年倫敦海軍條約所定量超過潛水艦
保有問題ニ關スル件

本件ニ關シ別紙ノ通閣議決定相成様致度此段及請議候也



帝國政府ハ本年七月英國政府ヨリ千九百三十年倫敦海軍條約第二十一條ノ規定ニ從ヒ條約量超過驅逐艦四萬噸ヲ保有スルニ決シタル旨ノ通報ニ接シタルニ依リ右ニ對シ我方ハ條約量超過驅逐艦一萬一千五十九噸及潛水艦一萬五千五百九十八噸合計二萬六千六百五十七噸ヲ保有スヘキ旨英米兩國政府へ通告シタリ

右ニ對シ米國政府ハ右我方ノ潛水艦保有ノ爲ニ倫敦條約第二十一條即「エスカレーター」條項ノ適用方ヲ示唆シ來リ又最近英國政府ハ明年ヨリ海軍々備ノ量的制限消滅セントスルニ鑑ミ且又英國トシテハ歐洲ノ政情ニモ顧ミ此ノ際關係國ニ於テ尙使用ニ堪フル條約量超過艦船ハ夫々保有シ得ルコトトスルヲ適當トスヘシトノ見地ヨリ同國乙級巡洋艦五隻（二萬一千百二十噸）保有ノ爲倫敦條約第二十一條ヲ廣義ニ解シテ適用シタル旨申越スト共ニ我方ニ於テモ潛水艦ニ付同條項ヲ適用センコトヲ示唆シ右ニ對シ帝國政府ノ同意方ヲ希望シ來レリ

惟フニ帝國政府ノ本件潛水艦保有ニ關シテハ前顯ノ如ク既ニ英米兩國政府ニ通告シタル所ニシテ今日重ネテ右ニ關シ倫敦條約第二十一條適用ノ形式ヲ執ルノ要ナキカ如キモ英米兩國共右適用ノ形式ニ據ランコトヲ示唆シ居リ、又右條項ヲ廣義ニ解シテ乙級巡洋艦ニ適用セントスル英側ノ希望ニ對シ米國政府ハ既ニ異議ナキ態度ヲ表示シタルニ鑑ミ、且又倫敦條約カ本年末ヲ以テ失效セントスル此ノ際同條約關係問題カ本年中ニ各國ニトリ圓滿ニ解決セラルコトハ望マシキ儀ナルニ依リ茲ニ帝國政府ハ國際關係ノ大局的見地ヨリ英米側ノ示唆ニ應シ前顯我方潛水艦ニ付更メテ倫敦條約第二十一條適用ノ形式ニ據ルコトスルト共ニ英國政府ノ同條項ヲ廣義ニ解シテ同國乙級巡洋艦ニ適用セントスル希望ニ對シテハ異議ヲ唱ヘサルコトト致度シ

叶

坂田